

が見られたかと思うと、翌年には全く見られなくなるか極少数に激減してしまう事が観察された。逆に、前池 (No. 2) や大池 (No. 39) では、大群落の見られた翌年にも、前年と変わらない程の群落を確認された。何故この様な現象が見られるのか、気候的な背景や種子の発芽機構の特性、陸上植物で見られる厭地現象等を考えてみたが不明である。

宮下 (1983) は、新潟県佐潟において、オニバス帯と呼ばれる例年群落の出来る場所のある事を報告した。香川県における観察結果では、年毎にほぼ同じ位置にオニバスが生育する産地が14箇所あった。また、生育場所が定まらず、年毎に位置の異なる場合が8箇所であった。残り18箇所については、どちらとも決め難い。この生育位置の問題は、ため池の形態的特性と関係していると思われるので、今後生育地の形態調査を詳しく行う必要がある。

オニバスの生活史において、初期浮葉段階に、多くの個体が消えてしまう事が知られている (角野, 1983)。宮下 (1983) は、生育初期に個体が根ごと抜けて消失し、個体が極端に減少する事を観察した。筆者は、1983年7月3日から8月9日の間に小原池 (No. 1) において、初期浮葉段階の個体が著しく減少するのを観察した。生憎その当時詳しい調査を行っていないので、減少率やその原因については不明である。また香川植物の会の大石泰輔は、1983年7月17日上金法寺池 (No. 16) で約20株、

下金法寺池 (No. 17) で1株のスイレン型初期浮葉を確認していた。その後8月12日筆者が調査に訪れた時には、上金法寺池に3株、下金法寺池では皆無の状態に減少していた。このような生育初期の消失現象は、ほとんどの生育地で起っていると思われ、その後の大群落への発達や皆無状態への影響が考えられる。従って、秋期調査で生育が確認されない場合でも、必ずしもその年に発芽しなかったと言う事ではない。今回の様な秋期における生育状況の調査結果と、発芽から初期浮葉段階当りの生育状況とは、区別して取り扱う必要がある。

文 献

- 角野康郎 1983. オニバスの自然誌. *Nature Study* 29 (6) : 63-66.
- 久米 修 1985. 香川県におけるオニバスの分布. *水草研究会報* 21 : 9-12.
- 宮下佳子 1983. 新潟県佐潟のオニバス. *水草研究会報* 11 : 4-6.
- 宮脇 昭 (編). 1980. 日本植生誌 屋久島. 350-351, 至文堂
- 大滝末男 1982. 太古の謎をひめて花開くオニバス. *アニマ* 115 (9) : 54-60.
- 脇田晴美 1959. 名古屋市及び尾張北東部における水生植物の調査並にオニバスの生態学的考察. 中部日本自然科学調査団報告 3 : 5-7.

○『国指定天然記念物小堤西池カキツバタ群落調査報告書』(刈谷市教育委員会、昭和61年3月、58頁)

表記のカキツバタ群落の保護育成の対策をはかるためにおこなわれた現況調査の報告書である。調査は地質、植物(植生とフローラ)、動物相の3分野にわたっているが、植物では、小堤西池内にみられる群落区分とその記載、植生図、植物目録が中心となっている。全国の植生調査資料の検討から天然のカキツバタ群落というものの姿をさぐり、その上で小堤西池の特性を浮かび上げようという試みと、同池におけるカキツバタの変異に関する観察も含まれる。最後に保存対策のための15の具体的提言がまとめられている。

○吉倉 真監修『江津湖の自然』(熊本生物研究所、昭和61年8月、112頁)

熊本市南東にあって豊富な湧水で知られる江津湖の自然を紹介したフィールドガイド。江津湖の成り立ちと自然環境を概説したあとは、野鳥、魚、トンボ・水生昆虫、その他の動物、植物の順に、カラー写真集となっている。植物では、周辺の野草も含めて81種が紹介されている。ヒラモ、ヒメバイカモ、キタミノウなどが、他の地域ではあまり見られない植物といえようか。

(角野康郎)